A-13　（個人発表　6 月 13 日(日)11:30～11:55　N213 教室）

茶馬古道の木地製作

田畑久夫（昭和女子大学）・金丸良子（麗澤大学）

本発表の対象地域である茶馬古道とは、中華人民共和国西部の大半を占めるチベット自治区、四川省、雲南省の間をつなぐ古代より発達した交易ルートを指す。その名称は、四川省や雲南省で加工・製品化された製茶などと、チベット産の馬や薬草などの薬材との交易において、馬を使用して互いの商品を目的地にまで運搬したことに因んでいる。茶馬古道は唐代（705～907年）にその原形が生じ、その後、明・清時代（1368～1644年）に急速に発達した街道である。茶馬古道は１つの古道を意味するのではなく、普庁茶の生産拠点であった雲南省普庁県を中心に、チベット・北京・ミャンマー・ラオス・ベトナムに向けて合計５つの古道が存在したと言われている。現在では茶馬古道は、国内の観光客は言うに及ばず外国人観光客も増加しており、中国西部最大の観光スポットになりつつある。チベット族、イ族、ナシ族はそれぞれチベット自治区の区都ラサに通じる茶馬古道沿いに分布し、自らが製作した椀・盆などに代表される木地製品をこの古道を通じてラサに送ったり、周辺地域で販売した。ラサあるいは茶馬古道周辺地域において、木地製品が現在でも一定の需要が認められるのは、次のような理由からである。第１に、チベット族はブータン人などと同様に、自身が使用する食器（椀）を各人が常に持参しているという習慣をもつ。しかし、一般に使用されている陶器製の碗は重く、かつ壊れやすいので、軽量でしかも壊れにくい椀が重宝がられるのである。第２としては、他地域では台湾あるいは福建省の漢族資本による比較的大規模な会社（公司）が、椀など木地製品を電気を動力とするロクロを用いて大量に製造し、安価な価格で販売している。しかし、茶馬古道周辺地域では、海抜高度が高いため、原木の広葉樹の大木が非常に少なく、大量生産に向かない。しかも、会社形式で大量に製造されているため、製品が粗悪なものが多い。椀は直接口や手に触れることからその感触も重視される。この点からも、大量生産の椀はチベット族の口にあわない。第３としては、近年軽量かつ安価なプラスチック製の碗が出回っている。しかし、これらのプラスチック製の碗は熱湯を入れると熱くて持ちにくい。チベット族の主食であるツァンパ、バター茶はともに熱湯を注ぐため碗では不向きとなる。以上の理由から、チベット族を筆頭にその周辺地域に分布・居住する少数民族間では、椀が食器として現在でも利用されている。

事例として取りあげたチベット族、イ族、、ナシ族は、それぞれ隣接する地域に分布・居住する少数民族である。これらの３少数民族の中でも、茶馬古道沿いにそった交通の便利な場所に居住する一部の人びとが椀などの木地製作に従事している。木地製作の特徴は、工程の中心ではロクロを使用することである。上記の３少数民族は、現在でも木地製作の工人（日本では木地屋あるいは木地師と称される）が、電気ロクロを使用する場合もあるが一人挽きロクロを使用している。その理由は、充分に安定した電力が得られないことと、周辺に製品を製作できそうな広葉樹の大木が少ないことから、電気ロクロの使用に比べて生産性の低い一人挽きロクロが使用されている。

以上述べたように、茶馬古道沿いに居住するチベット族、イ族、ナシ族に関しては、木地製作上共通した点も多い。しかし、チベット族の木地製作は、ラサ周辺では海抜高度が高いため原木の入手が困難で、木地製作は行なわれず、雲南省北部など比較的高度の低い地域に降りてきたチベット族が木地製作に従事し、茶馬古道を利用してラサに運んでいる。イ族の場合、製作した木地製品はラサなどの大消費地に運ばれることなく、周辺地域の住民用に販売されることが多い。そのため椀などの伝統的な製品に加えて、住民の要望が多い酒杯などの製品も製作している。またナシ族の場合、茶馬古道沿いに麗江という大観光地があるため、木鈴などの土産物を観光客相手に販売するなどしている。

本発表では、以上の３少数民族の木地製作に関して、各々の特色をスライド、図表を用いることで多面的・具体的に考察する。

【参考文献】

田畑・金丸（2001）：『中国少数民族事典』東京堂出版
田畑久夫（2002）：『木地屋集落――系譜と変遷』古今書院
張建世他（2005）：『西南少数民族民間工芸文化資源保護研究』四川民族出版社

【 茶馬古道、木地製作、チベット族、イ族、ナシ族 】